

高島藤樹会

(題字は、竹脇曼卿先生によるものです)

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224

滋賀県高島市安曇川町上小川1225-1

藤樹書院・良知館内

電話・FAX 0740 (32) 4156

会長就任おめでとう

会長 田中 清行



この度、高島藤樹会の会長に選任されました田中清行です。どうぞよろしくお願ひいた

します。

まず、先般の西日本豪雨により藤樹先生がとりもつ高島市との友好都市、大洲市の中で大きな災害を受けられました、たくさんの方々に対し、心からお見舞い申し上げます。

高島藤樹会では、大洲市への支援策を検討しました結果、人的支援が難しいので、せめても義援金を募って大洲市へ寄付させていただくことにいたしました。

会員の皆様方には、郵便局の振替口座への入金による大洲市の被災者支援にご協力をよろしく願ひいたします。

さて、高島藤樹会は、開設されると同時に上田藤市郎氏が初代会長に就任され、藤樹生誕四百年事業等に参画して基盤を造っていただきました。

また、川越清司二代目会長の時に、NPO法人に移行してフォーラム担当、学習担当、広報担当、教材担

当、表彰担当等、委員会活動を通じて組織や事業の仕組みを構築していただきました。

私は、三代目会長として以下のとおり微力を尽くしたいと考えています。

七年前から私は学習委員長として、「藤樹人間学塾」を主宰し、藤樹先生の教えを学び、自分の頭で考えて行動し、日々の生活の中で生かすよう、毎月十名程の参加者と共に学んできました。その中で改めて感じますのは、藤樹先生の偉大さであります。先般講演していただいた陽明学者の林田先生の言のとおり、藤樹先生は代表的日本人に中でも一番の代表的日本人です。

現在、世界のトップリーダーでさえ、自国の利益、自分周辺の利益を真っ先に考えて行動するような「自利」の人が多い、おどましい時代になっていきます。このままいけば、争いはますます増え、これがエスカレートすれば戦争で地球は滅んでしまいます。

藤樹先生は『翁問答』の中で、「われも人も人間の形あるほどのものはみな兄弟なり」といわれ、自他の区別なく親切にする「利他」の精神を説かれています。

藤樹先生の「孝」の思想は、大宇宙(天)と私たちが親子関係の延長線上で繋がっているという、温かくて世界の皆が仲良くなれる素晴らしい

教えです。この思想こそが世界を戦争から救う唯一の大道、大きな道であります。

この素晴らしい思想を、まず高島藤樹会の皆で共有して全高島市に広め、そして全滋賀県に広め、その後全日本に広め、最終的には全世界へ広めていきたいと願っています。

もちろん私一人の力ではこの壮大なことができるわけがありません。

新執行部の皆さんとその戦略や戦術を検討し、約二百七十名の正会員の皆さんと力を合わせ、約二十社の賛助会員の企業様のご支援も得ながら、高島市や各種関係機関とも協力して、大きな目標の実現に向けて、先頭に立って尽力する覚悟です。

皆様方の格段のご協力とご支援を心からお願い申し上げます。

義援金の募集

大洲市の西日本豪雨災害で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

高島藤樹会で義援金を募ります。

同封の振替用紙で郵便局から義援金を高島藤樹会の別口の口座(会費入金口座とは別口)に振り込んでください。

9月末と10月末に高島藤樹会で取りまとめ大洲市役所へお送りいたします。

六月十七日、白浜荘において、総会並びに研修会（講話）を、百四十二名（内委任状百十一名）の参加を得て開催しました。（事務局）

平成三十年度 総会

川越清司会長の挨拶に続き、ご来賓の高島市教育委員会教育長上原重治様からご祝辞をいただきました。その後、高橋志郎さんが議長に選出され、議事に入りました。はじめに平成二十九年度の事業報告と決算報告並びに監査報告があり、承認されました。

平成 30 年度高島藤樹会総会



次に、報告事項である平成三十年度事業計画及び予算が報告されました。続いて、役員の改選となり、理事候補者案が承認されました。その後、臨時の理事会を開いて会長等役付理事を選任しました。結果を総会の場で発表され、田中清行新会長が

就任の挨拶をし、総会を閉じました。

今年度の事業実施の方針

◎中江藤樹先生の遺徳に親しむ高島市民をはじめすべての人々に対して、先生の思想の現代的意義研究顕彰及び普及を図るため、以下の事業を行う。

- ・中江藤樹思想の偉大さを内外にアピールするために役員をはじめ会員が高島市や地域と一体になって推進するように取り組む。
- ・心のセミナーとして、適切な講師による講演会を行い、県外からも集客する。
- ・毎月、藤樹人間学塾を行い、先生の著書『中庸解』等を中心に学び考えて日々の生活に生かせるよう努め、藤樹思想を高島市から全国に発信する。
- ・当会の趣旨、活動内容が周知されるよう、会報「高島藤樹会」の充実を図り、年3回発行する。ホームページを当会の活動にリンクさせて充実を図る。
- ・藤樹像制作を具体的に進める。
- ・藤樹紙芝居を活用して、先生の教えが子供たちからお年寄りまで幅広く親しまれるように図る。
- ・藤樹先生の教え、生き方を啓発されている方の表彰を行う。
- ・立志祭の日に理事が学校訪問して小学3年生に「五事を正す」のク

リアファイルを贈呈する。

- ・当会の趣旨に賛同する正会員、賛助会員の勧誘を行い、会員の増強を図る。
- ・会長の事務負担が大きいため、有償で事務を補佐する体制を作る。

新役員の紹介

会長	田中 清行
副会長	徳丸 かつゑ
副会長	三田村 治夫
常務理事	
川越 清司	（表彰委員会担当）
高橋 志郎	（フォーラム委員会担当）
深川 澄雄	（広報委員会担当）
保木 隆	（学習委員会担当）
横井 正	（教材委員会担当）
理事（再任）	
飯田 典子	小多 偕裕
桑原 務	清水 鉄次
高橋 志郎	三田村 弘子
横井 正	
理事（新任）	
上山 基継	梅村 妙子
川島 達郎	富永 雄教
瀧田 豊朗	前川 為夫
山本 剛	
監事（新任）	
武田 基裕	松井 清

（再任→新任の順で五十音順、敬称略）

研修会（講話）

「出会いと座像制作」

講師 弘部 誠 先生

総会終了後、弘部誠先生から「出会いと座像制作」と題してご講話をいただきました。先生は、教材委員会より藤樹座像の制作の依頼を受け、現在その制作に当たっていただいています。

弘部先生は、小学生時代からこれまでの藤樹先生に関わることとの出会いについて、その時の出来事や思い出、藤樹先生の教えや先生の考え等を交えながらお話しいただき、会員一同、楽しく有意義な時を過ごすことができました。



後半には、現在お取り組みいただいている藤樹座像の制作について、試作品を提示されながらお話しくださいました。藤樹先生の顔を見た人は今はいないし、写真があるわけでもなく、どのような顔にするのか、何歳ぐらいの年齢を想定するのか、着物は袴か羽織か……など、ご苦心の様子が伝わってきました。素晴らしい藤樹座像の完成を楽しみにしたいと思います。

盛大な拍手で、講話が終了しました。

藤樹人間学塾… 「藤樹思想を学び考え実践する」

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月原則第一土曜日の午後、開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

高島藤樹会の活動

五月十九日（土）午後、第81回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』の「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中といい、発して皆節にあたる、これを和という」の項を学びました。喜怒哀楽のまだ発生していない時を中といい、心は純真であるが、喜怒哀楽を発すると万欲が起こって中を離れる。これを慎独の工夫することにより、和（庸）となる。フリーストリーキングでは、欲について考えました。人間が肉体を持っている以上、欲が起こるのは自然の事である。しかし必要以上のものを求めたり、欲が衝突すると世の中は争

いが絶えなくなる…。

本来、自分の身体は天地から与えられたものだから、富や地位を得ても他を利用するように行動すると全てが上手くいく、と話しました。

六月二日（日）午後、第82回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』の「中は天下の大本なり。和は天下の達道なり」の項を学びました。中（＝良知）は、天地万物の根本であって、すべては中から造化している。人が慎独の工夫をして和の境地に達すると、天地万物に通じて妨げるものがなくなるという内容です。

すなわち私たちの身体は、大宇宙と繋がっており、これに加えて心も大宇宙と繋がるように利他の精神で行動すれば、日々の生活の中で妨げるものがなくなり、すべてが順調に運ぶということです。



フリーストリーキングでは、道にゴミを捨てた人に対する怒りの感情のコントロール方法とゴミを拾おうとする時の気持ちの持ち方等について話し合いました。

塾終了後は、場所を替えて懇親会で楽しみました。

七月七日（土）午後、第83回人間学塾を安曇川公民館で行いました。最初に円覚寺の横田南陵管長の禅宗の僧がなぜ観音経を読経するのか、の話をしました。

その後、『中庸解』の「中和を致して天地位し、万物育す」の節を学びました。学問修養によつて中和に至ると天地と一体になって災害もなくなり、人も物も安らかになるというもの。

フリーストリーキングでは、人の心が和になれば世の中が変わる。他人の喜びを自分の喜びとすると幸福観がある。子供の純粋な心に教えられることがある。日本文化が生き残ってきた理由が分かった等の意見が出ました。

八月五日（日）午後、第84回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

まず脳科学者、中野信子さんの話を紹介しました。最新の脳の研究により、人は「利他の行動」をすることで愛情ホルモンが分泌されて高い幸福感が得られることが発見されたとのこと。

「中庸」と「孝の思想」を図示して、それに脳科学の利他の行動の話をに入れると、皆さんよく分かったと言っていたきました。

フリーストリーキングでは、高島市の人には、人に親切にという心が自然に備わっているという意見や、中村天風の絶対積極人生観と藤樹の「孝」の思想とは繋がっているという話も出ました。

学習会終了後、場所を替えて懇親会を行いました。長野県から来られた滝澤様からもいろいろお話を聴かせていただきました。



「藤樹人間学塾 今後の予定」

9月1日（土） 10月7日（日）、
11月3日（土）、◎12月1日（土）、
1月5日（土）、 2月2日（土）、
◎3月2日（土）

◆時間 15時～17時（原則）

◆場所 安曇川公民館

◆◎印は塾を終了後、別場所で懇親会あり

ひじりの声

上田藤市郎

藤樹書院を学びの場とすることが大切だと思い、毎月第一日曜日午後には論語などの講読を続けてきた。先月の論語の一文は、「子夏曰小人之過也必文」である。つまり、「子夏が言った、小人が過ちをする、きつとつくり飾ってごまかそうとする。」という内容である。

今の日本の世相、総理をはじめ与党の国会議員、官僚、スポーツ指導者、自動車会社社長の発言を聞くと、我が国の指導的立場にあるべき人物がこぞって小人であることがわかる。多くの国会議員がそのような風潮に異を唱えることもなく唯々諾々として大勢に逆らおうとしない。これらの人たちは自分の言動の過ちを自ら知りながら、これを恥じないように努めたのであ

る。藤樹先生が、自分の生き方に極めて厳しく、内村鑑三が驚嘆したような、誠実に生きるといふ誇りを、多くの普通の日本人は決して失ってはいない。ところが、社会的に指導的立場にある人たちは、自分の地位を守るために矜持を捨て、厚顔無恥になってしまった。このような言動は青少年に有害であることにも気づかず、それでおお、国民の信頼を得ていると勘違いしているのである。

「藤樹紙芝居」の紹介⑪

『竹生島での出会い』

(解説)

中江藤樹先生には数えきれないほどの逸話が残されています。今回は先生三十二歳の夏、弟子と共に琵琶湖に浮かぶ竹生島を訪れた実話に基づき『竹生島での出会い』として紙芝居に取り上げました。

先生母子と世間から疎外された若者との間で交わされる会話を通して、先生が優しく人を差別せず、慈しみの気持ちをもつて、若者の冷たく凍りつき、貝のように固く閉じた、荒んだ心を少しずつ解きほぐして、若者を夢のある社会へと導き、更生させていく過程を描きました。

藤樹先生の言葉に「人はだれもが美しい心を持っている。」というお話があります。大人も子供もみんな



が、自分の心の鏡を常に磨いて美しい心を持ち続けていきたくものです。

(紙芝居)

① 空は青空、いいお天気です。

与右衛門 「お母さん、とてもいいお天気になりましたね。今日十五日は、竹生島の弁天様のご縁日

(えんにち)ですから、お参りしましょう。びわこも静かだし、気持ちがいいと思いますよ。」

お母さん 「えっ、弁天様のご縁日に連れて行ってくれるのですか。

ありがたいですね、喜んでお参りますですよ。」

与右衛門さんとお母さんは、横江の浜から、舟に乗り込むと、船頭さんがゆっくり船をこぎ始めました。

船頭 「今日は、お天気は良いし、波も静かだし、きつと、弁天様は、いっぱいの人で、おおにぎわいですよ。」

船頭さんのこぐ舟も、気持ちよさそうに、すいすいと進んでいきます。やがて船は、竹生島に着きました。

与右衛門 「わあ、おおぜいのお参りの人で、お店も、たくさん出ていますね。さあ、鳥居をくぐると、長い石段を上りますから、足元に気を付けてくださいよ。」

お母さん 「はい、ありがとう。しかし、こんなに多くの人が、お参りされるんですね。」

与右衛門さんとお母さんは、お店の前を通って、弁天様への長い石段を上り、本堂の前までやってきま

した。

② 与右衛門 「お母さん、ここも、人がいっぱいですよ。」

お母さん 「そりゃ、ご縁日ですからね。さあ、お参りしましょう。」

与右衛門さんとお母さんは、まわりの人たちに、押されるようにして、弁天様に手を合わせ、お参りました。

与右衛門 「お母さん、それでは、そろそろ舟のところへ、帰りましょうか。」



お母さん 「そううですね、二人が歩き始めると、その前の方で、着物は破れ、汚れ

た一人の若者が、地面に座って若者 「おめぐみを、おめぐみ!」

と、お茶わんを差し出して、通る人たちへしきりに声をかけ、お金をもらおうとしているのです。しかし、横を通る人たちは、誰もその若者を相手にせず、通り過ぎて行きます。

与右衛門さんとお母さんも若者の前を通りかかりました。

③ その時です。

若者「あのう、おめぐみを、おめぐみを！」

若者は、一段と大きな声をあげるとお母さんの着物の袖(そで)をつかみました。お母さんは、びっくりして

お母さん「あれえ、何をするんですか。」



と、大きな声を出してしまいましたが、お母さんの着物の袖を引っ張っています。

お母さん「お願いですから、着物を離してください。」

お母さんが、困っています。

与右衛門さんは、若者の前にもどりました。

与右衛門「これ若者よ、その手を離しなさい。私のお母さんだ、このようにたくさんの方が、お参りしている所で、人に迷惑をかけては

いけないだろう。」

与右衛門さんとお母さん、そして若者の周りには、いつの間にか、人がたくさん集まってきました。

『こんなに人がいては、話もできない』と、与右衛門さんは思いました。

与右衛門「これ若者よ、お前と少し話したいから、ちょっと向こうへ行こう。」

与右衛門さんは、若者を人の多い場所から少し離れた、木の陰になっているところへ連れて行きました。

与右衛門「ここなら人も少ないし、静かだ。この石のところに、座ろう。お前と話がしたい。」

与右衛門さんと、若者は並んで座ると、お母さんも、少し離れて座りました。

④ 与右衛門「見たところ、お前はまだ若い青年だし、とても丈夫そうな体をしているな。それなのに、



仕事もせずに、どうして人から、めぐみを受けようなどしているのか。

どこで生まれて、なぜ、今ここにいるのだ。」

与右衛門さんは、優しく若者に語りかけました。

それを聞いた若者は、『この人は金をくれそうだ』と、思ったのか、いかにも悲しそうな顔をして、話し始めました。

若者「わしは、生まれてから、今まで、少しもいいことがなかったんだ。大坂で生まれて間もなく、母

さんが病気で死んでしまい、父さんも四つの時に、死んでしまつて、家もなくなつてしまった。それから、近所の人や親類の人に、食べ物や着るものをもらつたり、人が食べ残した物を食べたりしながら、空き家や橋の下で、暮らして、大きくなつてきた。

でも、何とか人から恵みをもらつて、暮らしているんだ。」

お母さん「まあ、かわいそうに、苦労してきたんですね。」

お母さんは、少し涙ぐんでいます。だまつて、若者の話を聞いていた与右衛門さんは、言いました。

与右衛門「小さい頃に、お父さんやお母さんが亡くなり、気の毒に苦労してきたんだな。」

与右衛門さんの言葉に若者は、『これでお金をもらえるだろう』と、思いました。

⑤ 与右衛門さんが聞きました。

与右衛門「しかし、お前は見たところ、まだ若者ではないか。しかも、大きくて丈夫そうな体をしていて元氣に見える。それなのになぜ働かないのか。」

与右衛門さんの言葉に若者は

若者「わしは幼い頃から、こうして、人のめぐみを受けて、生きてきて何をして働けばよいのかわからないし、もともと、働くことが、わしは大きいなんだ。だから、こ



れは楽な仕事だ、と思うようになって、こうして、人のたくさん集まる所へ行つてはみんなから、お金や物をもらつて、暮らしているんだ。」

若者は、与右衛門さんとおかあさんに、話しました。

与右衛門さんが、若者に言いました。

与右衛門「よいか、今、お前の話を聞いていて、働くのがきらいとか、こんな楽な仕事はないとかいうが、早くこんな暮らしから抜け出さなければいずれ生きてゆくことがで

きなくなると思うぞ。」

与右衛門さんの話を聞いていた若者は、

若者「いいんです、人の集まる所へ行つて、座つていれば、お金がもらえるし、今日一日、何とか食べられて、ぶらぶら遊べたら、こんな楽な仕事はないからな。これからも、やめられないよ。それよりも、お金はくれるんですか。もらえないなら、早くさっきのところへ戻つて、座らないと。」

そういうと若者は元の場所に戻ろうとします。

⑥ 与右衛門「まで、まで、金はやろう。しかし、私の話を聞いてからだ。よいか。」

与右衛門さんが、そういうと若者は、また石の上に座りました。

若者「金をくれるというなら、聞いてやるよ。今度は、何が聞きたいんだ。」



与右衛門さんは、若者の顔を見つめました。若者は、与右衛門さんの顔を見ず、横を向きな

がら、

若者「早くしてくれよ、わしの客が行つてしまふじゃないか。」

与右衛門さんは、ゆっくりと話を始めました。

与右衛門「おまえのその立派な体は、誰からもらったものだと思うか。」

若者「そりゃ、わしが苦勞して物を食べてきたので、この体になったんだよ。」

若者は、大きな胸を張つて答えました。与右衛門さんはそれを見て、与右衛門「そうだな、幼い頃から苦勞してきただろうからな。しかし、

お前ひとりで大きくなったのではないぞ。お前が生まれてきたのは、お父さんがいて、お母さんがいて、そしてお前が生まれた。違うか、確かに生まれて間もなく、ご両親が病気で亡くなつてしまわれた。お前にとっては、とても気の毒なことだと思うが、その丈夫な身体をくれたのは、紛れもなくお前の両親だぞ。それはお前にもわかるな。その親のご恩を忘れてはいないか。それに、本当に、だれの世話にもならずに、大きくなつたと、思うか。」

⑦ 与右衛門さんは、一言ずつ、ゆっくりと若者に話しかけました。若者は、きよきよと周りを見ながら話を聞いていたが、やがて与右



衛門さんの顔をみて、

若者「わしは、親から、何もしてもらつていない。わしが、

ひとりで苦勞して、食べてきたんだ。だれの、世話にも、なつてないかい。それに、わしにいちいち文句を言う、あんたは一体だれなんだ。わしは、初めて会った、あんたに言われることはないんだ。どうせ、わずかな金しかくれないのだろうに。」

若者は、与右衛門さんに、かみつくように言いました。

与右衛門「そうか、それは私が悪かった。お前がそう思うのも、無理はない。私は、西江州（にしこうしゅう）の小川村から、弁天様にお母さんとお参りに来た者でな、中江与右衛門という者だ。弁天様の前で、お前に出会ったのも何かのご縁だ。きっと、お前のお父さんや、お母さんが弁天様に頼んだのかも知れないな。『わたしの息子を、助けてください』とな。それにお前、お金や物をもらった多

くの人たちに助けられているではないか。」

⑧ お母さん「どうしました、どこか体が悪くなりましたか。」

与右衛門さんのお母さんが声をかけました。

若者「いえ、どこも悪くなんかありません。」

そういつて顔をあげた、若者の目から涙がぼろぼろとこぼれました。

若者「あなたが、中江与右衛門先生



生つて、本当ですか。中江先生といえ、わしみたいな暮らしをしてい

は聞いています。しかも、こんな姿のわしに、声をかけてくださる方とは、思つてもいなかった。

わしは、今までだから、優しくしてもらつたことがないんです。先生みたいに、こんな言葉をかけてくれた人は初めてです。」

若者の目から涙があふれ出てきます。

与右衛門さんは、若者の目をしっかり見て言いました。

与右衛門「人は、本当はだれでも優しく、きれいな心を持っているものなんだよ。お前は、今まで一人で生きていく苦労のために、その優しく、美しい心をかくしていたんだ。お前は、心の中ではまじめに働きたいと思っている。だがその働く勇気が出てこないのではないか。どうだ、思い切ってこんな生活から抜け出さないか。新しい自分に生まれ変わるんだ。それが今だぞ！」

与右衛門さんも、何とかこの若者を救いたいと必死でした。

⑨ **若者**「先生、わし、やってみます。必ず、生まれ変わる、気持ちになつてやります。わしを、見ていてください。お願いします。」



与右衛門さんを見る若者の涙にぬれた目が、輝いていました。

『この若者は本気だ。これで、きつと立ち直れる』

と、与右衛門さんは、思いました。

与右衛門「よし、それなら、お前が本当にまじめに働く人間になつていくか、これから一年たつた来年の今日、もう一度、この弁天様の前でとお前と会おうではないか。約束できるか。私は必ずここへ来て待つているぞ。よいな。」

若者「はい、わかりました。約束します。」

若者の輝く表情を見届けた、与右衛門さんとお母さんは、小川村へ帰つて行きました。

お母さん「あの若者は来年も竹生島に来るでしょうか。」

お母さんも、若者がまじめに働いている姿を、見せてほしいと願っていました。

与右衛門「大丈夫ですよ。お母さん、必ず竹生島に姿を見せてくれますよ。私はあの若者を信じています。」

⑩ やがて、秋が来て、冬、そして一年が過ぎ、与右衛門さんとお母さんは、再び、竹生島へお参りにやつてきました。

お母さん「あの若者は来るでしょうか。」

お母さんが心配そうに、与右衛門さんに聞きました。

与右衛門「大丈夫、必ず来ています。」

よ。」

二人が弁天様にお参りをしているところから、

若者「中江先生、お待ちしていました。」

その声におどろいて二人が振り向くと、そこには一年前より、一段とたくましくなった若者が、にこにこしながら立っています。



若者

「一年前には、私を導いてくださり、ありがとうございます。うございしました。私は今、大工の仕事を、親方の家に住んで習っています。親方は厳しく、でも優しく私に教えてくれます。だから、いつか自分の力で家が、建てられるようにがんばります。」

先生に助けていただいたおかげです。本当にありがとうございます。」

与右衛門さんのお母さんは、うれしくて涙が出そうになりました。

与右衛門「そうか、それはよかった、よかった。きつと、お前のご両親

も大喜びのことだろう。このことを忘れずに、これからもがんばりなさい。今日は、弁天様へお参りに来て本当に良かった。私たちも、こんなうれしいことはない。」

お母さん、弁天様にお参りに来ると良いことばかりがありますね。」

与右衛門さんとお母さんは、若者と別れ、小川村へ帰つて行きました。(おしまい)

▼脚本・挿絵

高島藤樹会教材委員会

▼制作委員

足立 清勝 飯田 典子
石黒 紀代子 北川 暢子
清川 貞治 高谷 美智子
山本 義雄 (五十音順)

▼参考文献

「藤樹先生年譜」 藤樹頌徳会 発行
「物語中江藤樹」 松下亀太郎 著
「中江藤樹百話」 河村定静 著
日本藤樹学会 発行
求光閣書店 発

藤樹記念館通信⑦

第三十一回記念館小企画展開催中

館長 富永 雄教

現在、当記念館では、「大洲における中江藤樹のあゆみ」をテーマに小企画展を開催しております。

中江藤樹は高島郡小川村で生まれ、九歳の時、祖父に連れられて米子に移り、翌年一〇歳の時、藩主が大洲へ国替えとなったことにより祖父とともに大洲へと移りました。その後、大洲を脱藩して小川村に帰るまでの一七年間を大洲で過ごしました。子ども時代から立派な武士として活躍するまでに成長した大洲の地でのこの一七年间は、中江藤樹にとってどのような時代であるといえるのか、そのあゆみを当時をしのぶ中江藤樹直筆の文や書、肖像画、写真等の資料で紹介しています。

本小企画展では、「大洲における中江藤樹」と

「町並みと史跡」、

「顕彰のあゆみ」

の三部構成で展示しています。



①【大洲における中江藤樹】

一部では、大洲での中江藤樹の様子を知る資料として大洲藩に残る記録、役職を記した肖像画、中江藤樹の文書、明治時代に印刷された中江藤樹の逸話絵図、昭和初期の紙芝居、中江藤樹を直接指導した天梁和尚の書などを紹介しています。



中江与右衛門肖像画
(大洲高等学校所蔵)

大洲に移り住んだ藤樹は一三歳の春まで風早郡で過ごし、この間に様々な書物を読み、学びを深めました。一四歳の時から曹溪院の和尚から書や詩を習い、その後、禅僧から『論語』を習い、以後四書大全を独学で学びます。一九歳の時、郡奉行に登用され、大学啓蒙などの本を自分で書き、門人に与えました。

②【大洲の町並みと中江藤樹の史跡】

第二部では、過去・現在にわたり大洲の町並みに溶け込む中江藤樹を感じ取っていただけるよう、大洲市街の地図にゆかりの史跡の写真を配し、現在の様子や位置関係を紹介しています。大洲城内の見晴らしの良い高台に藤樹座像が置かれ、大洲での武士としての

活躍が偲ばれます。また、大洲高校には中江藤樹が実際に暮らした屋敷跡に至徳堂が建築され、庭には藤樹青年像が建てられています。



大洲小学校

大洲小学校にも藤樹像が建てられ、大洲の方々の藤樹に対する尊崇の念の深さを感じます。

③【大洲における藤樹顕彰のあゆみ】

第三部では、藩校「明倫堂」設立にかかわる資料や三代に及ぶ藤樹像の写真、明治時代に描かれた中江藤樹贈位を記念する肖像画などを展示しています。

川田雄琴は、三輪執斎から大洲に藤樹の祠堂を建立して藤樹心学を盛んにすることを委託され、一七四七年に藩校「明倫堂」を完成しました。大洲における藤樹顕彰事業は、過去に百年忌の祭礼や二五〇年祭記念事業、生誕三五〇年祭、生誕四〇〇年記念碑建立等が行われています。

また、一九〇二年には、大洲藤樹会が発足し、銅像の建設や藤樹会主催の研修会など様々な顕彰活動が行われています。

賛助会員一覧

新規賛助会員のご紹介

◎寺子屋まなざし童心塾
(長浜市南高田町)

◎田中マネジメント事務所
(高島市永田)

◎ウエストレイクホテル可以登楼
ご協力ありがとうございます

◎株式会社 大山建設

◎川島酒造 株式会社

◎株式会社 桑原組

◎有限会社 宏和商事

◎税理士法人・小畑会計事務所

◎有限会社 白浜荘

◎社会福祉法人 新旭みのり会

◎ソエタ 株式会社

◎株式会社 TADコーポレーション

◎鉄屋商事 株式会社

◎株式会社 戸井薬局

◎とも栄 藤樹街道本店

◎中村印刷 株式会社

◎株式会社 中村測量設計

◎ニッケイ工業 株式会社

◎八田建設 株式会社

◎有限会社 馬場塗装

◎三田村印刷 株式会社

◎有限会社 綿庄食品店 (五十音順)

◆賛助会員加入のお願い

ご協力いただける場合は、お近くの理事、または一面「発行所先」にお知らせください